

## はじめに

富士通では、当社の歴史を残すため、『富士通アーカイブズ』という活動を行っております。この活動の一環として皆様に富士通についてもっと知っていただきたいと考え、隔号で富士通についてのあれこれをご紹介させていただきます。

第五回目は、第9代社長山本卓眞の足跡を受け継がれてきた言葉と共にご紹介いたします。

## 1. 第9代社長 山本卓眞

1981年（昭和56年）、富士通（株）の第9代社長に就任した山本卓眞は、陸軍の軍人だった父親の勤務地であった熊本で生まれ、その後自らも陸軍航空士官学校に進み、過酷な訓練を体験します。士官学校での「敵を知り己を知れ」や「戦わずして勝て」などの教えはその後ビジネスの世界で生かされることになりました。

卒業後は満州に渡り、戦局が厳しくなる中、特攻隊員として出撃を予定していたその日に日本は全面降伏を宣言しました。山本は部隊長の「生きて祖国の再建に尽くせ」という言葉を胸に帰国し、その後東大で学び富士通信機製造（現富士通）に入社しました。

入社後は交換機の開発を経て、コンピュータ事業の黎明期からハード、ソフトの開発に携わった後第9代社長に就任しました。富士通そして日本だけでなく他国の発展をも視野に入れて事業を展開し、社会に貢献するためには主張すべきことは主張する、という信念をもって富士通を牽引していきました。

通信事業では、米国AT&Tの光通信システム国際入札で一番札をとりながら、ダンピング入札と言われ受注できないという事件がおきましたが、富士通の技術の先進性と正当性を強く主張。結果は覆らなかったものの、これにより富士通の技術力が米国内で認識されることとなりました。その後MCI社の光通信システムを受注したことを皮切りに米国市場で高いシェアをとることに繋がりました。

英国ではICLとの技術提携を進め、世界を視野に入れたコンピュータビジネスを継続させていきました。一方、半導体事業では、インテル創設者など多くの技術者を生み出した米国フェアチャイルドの買収を進めたものの日米貿易摩擦の影響を受け断念するという苦渋の決断をしました。



第9代社長山本卓眞



米国光通信建設風景(1980年代前半)

## 2. 志をもて/夢をかたちに

山本が社長に在任した1980年代は、電化製品や自動車などの輸出が急増し日米間の貿易不均衡が拡大、閉鎖的な日本市場に米国企業が参入しにくいと批判され、半導体やコンピュータといったハイテク分野の日本製品が米国から締め出されるなど、日米貿易摩擦が激化した時代でした。

そのような時代のリーダーとして山本は、社長就任時にこのように述べています。

「ここぞというときに、若い人の潜在力を引き出すのはリーダーの務めですが、若い人をお願いしたいのは、志を持つということです。個人じゃ達成できないような大きな目標を立ててほしいなあ。サラリーマンの喜びというのは、志を立ててそれを達成することです。何もこれはサラリーマンだけとはいえないですがね、これが人間の充実感だと思うんですよ。」（「富士通ニュース」1981年（昭和56年）7月号）

また、1986年には常に世界の最先端に行く新しい技術を創造する富士通の姿を表現した新スローガン「夢をかたちに」を発表し、スローガンに託した想いを後に次のように述べています。

「富士通は会社の使命を「夢をかたちに」という言葉で表している。社員の一人ひとりがたとえばエンジニアであれば自分の夢を大切に育み、社会の夢をかなえ、結果的に人類の大きな夢である環境問題や南北格差問題の解決に向けて貢献することを誰が反対するだろうか。こうした考えは洋の東西を問わず共通の認識ではないだろうか。」（山本卓眞著「夢をかたちに」1992年（平成4年）刊）

志/目標をもてという山本のDNAは今に受け継がれ、人を幸せにするヒューマンセントリックなイノベーションの実現に挑戦するという目標に向かって、IoTや人工知能といったデジタル・テクノロジーを活用して、お客様と共にデジタル革新に取り組んでまいります。



挨拶する山本卓眞

夢をかたちに  
信頼と創造の富士通

スローガン「夢をかたちに」ロゴ

## 3. 富士通の歴史見学施設

富士通沼津工場には、歴史に触れる施設として、『富士通アーカイブズ』の展示エリアやコンピュータの発展に寄与した池田敏雄を紹介する『池田記念室』があります。是非、ご見学にお越しく下さい。

富士通はこれからもみなさまとともに成長し、社会的使命を果たして参ります。ご支援、ご愛顧いただきますようよろしくお願い申し上げます。

『富士通アーカイブズ』の見学をご希望される場合は、営業までお問い合わせください。